

障害・職業・社会階層  
2011年アイルランド国勢調査  
個票データの分析

榊原賢二郎

sakakibara\_kenjirou@yahoo.co.jp

平成30年11月18日 障害学会大会報告

# 障害と労働からの排除

社会モデルにおける障害<sup>[1]</sup>

… 社会的排除・不利益

とりわけUPIASは労働からの排除をディスアビリティの根本と把握

第一の問い: 各種障害者の就労機会  
(既に分析、本日は省略)

↔ 職業の種類も重要

← 社会的不利益・排除と結びつく

# 職業と社会階層

職業 → 人が得られる **社会的資源**

… 富・威信・権力 etc.

多くの人々が欲するが稀少

**社会階層**<sup>[2][3]</sup> 社会的資源を同じぐらい  
持っている人々の集団

**階層分化** 社会が異なる階層に分かれて  
いること

… 不平等の一種 ↔ 社会的資源に限定

# 階層と排除

**社会的排除**<sup>[4]</sup> 社会の諸領域への参加機  
会の制約

広義には<sup>[5]</sup>階層問題も射程に

↔ 狭義には著しい階層的不平等と関連

今回の主題… 階層・排除にまたがる

特に「単純労働」の多さはディーセント  
ワークからの排除とも言える

# データと選択理由

## アイルランド国勢調査個票データ

- 障害関連情報を含む
- IPUMS-International<sup>[6]</sup> から利用可能  
(国勢調査データの国際的データベース)
- 今回は先進国に焦点

2011年4月10日実施、留置調査  
※経済危機後

# 分析対象のケース数

---

|                      |          |
|----------------------|----------|
| 総数 (全データの<br>約1割を抽出) | 47万4353件 |
|----------------------|----------|

---

|                  |          |
|------------------|----------|
| 生産年齢<br>(15-64歳) | 30万3773件 |
|------------------|----------|

---

|         |          |
|---------|----------|
| 就労・有効回答 | 16万3058件 |
|---------|----------|

---

# 障害関連項目

---

|    |       |     |       |
|----|-------|-----|-------|
| 視覚 | 0.41% | 学習  | 0.71% |
| 聴覚 | 0.84% | 情緒  | 0.80% |
| 肢体 | 0.97% | その他 | 2.77% |
| 知的 | 0.23% |     |       |

---

質問文に損傷と活動制限<sup>[7]</sup>が混ざる

→ 厳密な比較ではない

↔ 各項目の影響は測定可能

# 職種分類

---

|   |     |   |              |
|---|-----|---|--------------|
| 1 | 管理職 | 6 | サービス職        |
| 2 | 専門職 | 7 | 販売職          |
| 3 | 技術職 | 8 | 工程従事者        |
| 4 | 事務職 | 9 | 単純労働者        |
| 5 | 技能工 |   | (elementary) |

---

この下に89の小分類



# 職種分類

---

|   |     |   |              |
|---|-----|---|--------------|
| 1 | 管理職 | 6 | サービス職        |
| 2 | 専門職 | 7 | 販売職          |
| 3 | 技術職 | 8 | 工程従事者        |
| 4 | 事務職 | 9 | 単純労働者        |
| 5 | 技能工 |   | (elementary) |

---

この下に89の小分類

# 職種と階層

## 管理・専門職

全般として社会的資源(富・威信)に恵まれている可能性

## 「単純労働」

単純・初歩的な仕事内容としての分類  
≠ 完全参加(※選択/傾向)  
… 階層問題・排除問題

# その他の属性

---

|          |                          |
|----------|--------------------------|
| 年齢       | 平均 40.0 歳<br>標準偏差 11.2 歳 |
| 男性       | 52.1%                    |
| アイルランド語  | 40.1%                    |
| 高等教育学位   | 37.4%                    |
| カトリック    | 84.3%                    |
| アイルランド民族 | 84.4%                    |

---

# 職種の分布 (%)

|    | 管理  | 専門   | 単純   |
|----|-----|------|------|
| 全体 | 9.1 | 19.9 | 8.7  |
| 視覚 | 8.3 | 15.3 | 12.3 |
| 聴覚 | 8.6 | 13.5 | 11.1 |
| 肢体 | 7.1 | 12.7 | 12.2 |
| 知的 | 3.5 | 4.0  | 29.2 |
| 学習 | 5.0 | 6.8  | 18.9 |
| 情緒 | 6.2 | 16.7 | 10.7 |
| 他  | 8.6 | 19.8 | 9.6  |

# クロス集計から

以上の表が示唆する傾向

… 「損傷」を持つ就労者の職種

- 管理・専門職は全体平均より少ない
- 単純労働は全体平均より多い

↔ 年齢や学歴などにも違い

条件を揃えても以上の傾向は現れるか

→ 多変量解析

(ここでは多項ロジスティック回帰)

# 前提: 起こりやすさの変化の指標

例: サッカーの試合に勝つ見込み

|     | 勝 | 負 | 確率  |
|-----|---|---|-----|
| 合宿前 | 1 | 1 | 50% |
| 合宿後 | 3 | 1 | 75% |

相対リスク: 1.5 (50%→75%)

オッズ比: 3 (1:1→3:1)

- 1より大きい=起こりやすくなった
- まれな現象では両者ほぼ同じ

# 前提: 起こりやすさの変化の指標

例: サッカーの試合に勝つ見込み

|     | 勝 | 負 | 確率  |
|-----|---|---|-----|
| 合宿前 | 1 | 1 | 50% |
| 合宿後 | 3 | 1 | 75% |

相対リスク: 1.5 (50%→75%)

オッズ比: 3 (1:1→3:1)

- 1より大きい=起こりやすくなった
- まれな現象では両者ほぼ同じ

# 参考：就労可能性のオッズ比

就労中=1、性・年齢のみ統制

---

|    |      |     |      |
|----|------|-----|------|
| 視覚 | 0.58 | 学習  | 0.50 |
| 聴覚 | 0.73 | 情緒  | 0.23 |
| 肢体 | 0.21 | その他 | 0.48 |
| 知的 | 0.36 |     |      |

---

全て有意、1より小さい

→ディスアビリティの存在を立証

この差を度外視した時、職種面で更なる

相違が残るかどうかが今回の課題



# 多項ロジスティック回帰分析

人々の職種 ← 多くの要因が影響

… 身体的条件・性別・学歴 etc.

→ それぞれの要因のオッズ比を推定

ここでは職種は9種類(大分類)

→ 単純労働と他の職業のいずれを選ぶかに注目。特に以下

- 管理職:単純労働
- 専門職:単純労働

# オッズ比 (上記属性を投入、略)

|    | 管理:単純   | 専門:単純   |
|----|---------|---------|
| 視覚 | 0.85    | 0.77    |
| 聴覚 | 0.73 *  | 0.77    |
| 肢体 | 0.69 ** | 0.70 ** |
| 知的 | 0.53 *  | 0.24 ** |
| 学習 | 0.45 ** | 0.40 ** |
| 情緒 | 0.62 ** | 0.71 ** |
| 他  | 1.22 ** | 1.02    |

\* < 5%, \*\* < 1%

# 考察 (1)——全般的な不利

既に就労機会に有意の差

↔ 職種でも全般的に不利

… 単純労働が多く管理・専門職が少ない  
(一部係数は有意ではないが1より小)

単純労働が多いことは、ディーセント  
ワークからの排除を示唆

管理・専門職の少なさ → 階層問題

## 考察 (2)——種別間の相違

ただし種別により状況は著しく異なる  
障害者を一括して語ることは不可能

特に知的・学習障害の不利が顕著  
管理・専門職における知識の重要性  
cf. 学歴との関連

## 考察 (3)——蓄積的排除

その他のより単純なモデルも検討

- 性・年齢・身体条件 → 職種
- 性・年齢・身体条件・教育 → 職種

知的・学習障害の不利は前者で大きく  
(例: 知的障害・専門 0.15→0.46)

不利益の複層化<sup>[8]</sup>・蓄積的排除<sup>[9]</sup>を示唆  
知的障害 → 教育の不利 → 職業の不利  
他の先天性障害者にも妥当する可能性

# 文献(1)

- ① UPIAS and DA(1976), *Fundamental Principles of Disability*, London: UPIAS and DA.
- ② 竹ノ下弘久 (2013) 『仕事と不平等の社会学』 弘文堂。
- ③ 富永健一 (編)(1979) 『日本の階層構造』 東京大学出版会。
- ④ 岩田正美 (2008) 『社会的排除』 有斐閣。
- ⑤ 榊原賢二郎 (2016) 『社会的包摂と身体』 生活書院。

## 文献 (2)

- 6 Minnesota Population Center (2017), *Integrated Public Use Microdata Series, International*, <https://doi.org/10.18128/D020.V6.5> .
- 7 WHO(2001), *International Classification of Functioning, Disability and Health*, Geneva: WHO.
- 8 星加良司 (2007) 『障害とは何か』 生活書院。
- 9 小松丈晃 (2003) 『リスク論のルーマン』 勁草書房。